令和七年度

滝川第二中学校　入学考査　問題

B日程

国語

（五十分・百五十点）

注意事項

1　問題は1ページから17ページまであります。
2　解答は、すべて解答用紙の枠内に記入しなさい。
3　「開始」の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
4　受験番号と氏名を、解答用紙と問題冊子の表紙に正しく記入しなさい。
5　「終了」の合図で筆記用具を置き、監督の先生の指示に従いなさい。

受験番号	氏　　名
一	

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。）

記者の資質は「話を聞いて理解する」「取材対象に共感する」「観察する」と言いました。科学記者としてはこれに「知ったかぶりをしない」ことが加わりますが、さらに重要なお作法があります。それは「疑う」ことです。

人を疑うなんて、あまりほめられたものではありませんね。ですが、科学の世界でも、記者という職業も、「疑う」ことはとても大事です。言い換えれば「言われた事を鵜呑みにしない」でしょうか。

たとえば世間には、記者をだまして自分に都合のいい記事を書かせようとしたり、自分が罪を逃れるために記者を利用しようとする人がいます。私たちは、ある人の話を聞いた後、必ず、その内容にウソや矛盾がないか確かめます。①「裏を取る」という作業ですが、これによって、結果的に誤った記事を出すことを防ぎます。

科学も同じです。たとえば、Aという現象に続いてBという現象が起きたとします。現象だけ見ていたら、「②AがBの原因になった」と思い込みがちです。しかし単に偶然に続いて起きたのかもしれません。そこをきちんと見分けることは、科学の基本です。研究の現場ではさらに、Aという現象を（　Ⅰ　）に起こして、Bが起きるかどうか確かめる作業もします。

「③四月一二日に巨大地震が起きる」

こんなうわさが二〇一五年春、日本を駆けめぐりました。※ツイッターやフェイスブックなどのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を通して、うわさはあっという間に広がりました。

広がったのには、理由がありました。四月一〇日、茨城県の海岸に、一五〇頭以上のイルカが打ち上げられました。おおぜいの人が集まって、イルカの肌が乾燥しないように水をかけたり、元気なイルカが海に戻れるように移動させたりしましたが、元気を失って死ぬイルカもいました。

一五〇頭も打ち上げられるなんて、めったに起きないできごとです。イルカは日本近海に住んでいますが、よほどのことがないかぎり、海岸に近寄ったりしないからです。

こうした珍しいできごとを「地震の前触れではないか」と言い出した人たちがいたのです。なぜなら、二〇一一年三月一一日、

東日本大震災が起きる前にも、同じようなできごとがあったからです。

さらに、アメリカにすむ霊能者が、日本で近く大きな地震が起きると予言していて、その人物が一九九五年一月一七日の阪神・淡路大震災も言い当てた、というわさが加わり、「ひょっとして本当では」と信じたり、そのことを友人に教えたりした人が相次いだのです。

（中略）

人間にとって、地震はこわいものです。いつ起きるか、どこで起きるかを予測する「地震予知」技術は確立していません。おばけと同じで「いつ、どこで出るか（発生するか）分からない」わけで、余計に不安がつのります。

もともと、「分からない」という状態は居心地の悪いものです。だから、一見正しそうな、説得力のある説明に飛びつきたくなるのです。今回、アメリカ人の予言とイルカの漂着という、ばらばらの事実が、「地震の前触れ」ということで結びつきました。

そもそも、イルカが打ち上げられることと、地震との間には関係があるのでしょうか。

因果関係（『広辞苑』では「原因とそれによって生ずる結果との関係」）があるとすれば、巨大地震が起きるたび、直前にイルカが海岸に打ち上げられなければならない。ですが、現実はそうではありません。つまり、因果関係は「ない」と考えた方が良さそうです。冷静に考えれば、うわさを信じる根拠は見つかりません。少なくとも、自分がうわさを友達にばらまくことはないでしょう。

大切なのは、科学的にはっきりしないことを、「鵜呑み」にしないこと。自分の頭で考えて判断することです。巨大地震が来ると信じ込んで、大切な予定をとりやめたり、不要なものまでたくさん買い込んで無駄遣いをしたりするのは、ばかばかしいと思います。

ところで、「科学的」と言うとき、私たちはそこに、客観的で揺るぎないものである、というイメージを持ちます。学校でも、理科が好きな人は「答えが一つに決まるから」「理屈で考えられるから」という理由をあげます。しかし、④そうした科学への信頼を利用して人を信じ込ませようとする人たちもいます。代表的なものが「疑似科学」です。

「疑似」とは「似ているけど違う」という意味で、「ニセ」と言い換えてもいいかもしれません。「科学もどき」と呼んでもいいでしょう。

科学的な手法で証明されたように見えますが、よく検討すると科学的根拠がないもの、あやしい仮説に科学者がお墨付きを与えてそれらしく見せているものなどがあり、科学に詳しくない人にとっては、見分けるのがやっかいです。

二〇年ほど前、⑤『水からの伝言』というタイトルの写真集がベストセラーになりました。各地の水道水や湖の水を凍らせ、できた氷の結晶をカラー写真で紹介したものです。

日本で初めて雪を人工的に作ることに成功した物理学者の中谷宇吉郎が「雪は天から送られた手紙」（『雪』、岩波文庫）という言葉を残したように、雪や氷の結晶が見せる表情はどこか（　Ⅱ　）で、眺めるだけでも心がいやされるものです。

さて、この写真集は「水は言葉を理解する」という仮説に基づいています。⑥その主張や実証方法に私は当初から違和感を覚えたのですが、まずは彼らの手法を紹介します。

透明な瓶に水をいれ、日本語で「ありがとう」と書いた紙を瓶の内側に向けて張ります。しばらくして瓶の中の水のしずくをガラス板の上に垂らして凍らせます。すると、きれいな結晶ができます。

いっぽう、「ばかやろう」とか「ムカツク」「死ね」といった否定的な言葉を書いた紙を張った瓶の中の水は、結晶にならなかったり、整っていない結晶になったりするといいます。

英語やハングルなどの外国語で試した実験でも、同様の結果が得られたそうです。

言葉ではなく、さまざまな音楽を「聴かせた」水を凍らせてみる実験も紹介されています。クラシック音楽や仏教のお経では、きれいな結晶になり、悲しい歌詞の民謡や、攻撃的な歌詞とリズムが特徴のヘビーメタル音楽は、結晶ができない、という結果が紹介されています。

水が文字を認識し、意味を理解する能力を持っている、ということだけでも天地がひっくり返るような発見ですが、聴覚まであるとは初耳です。あとがきには「ひとりよがりの本になるのではなく、みなさんからご意見をいただいて、この研究を科学的、哲学的な意味合いに引き上げていく方向に向かうことを願っています」と著者のコメントがありました。

みなさんはどう受け止めましたか。カガク力が少々身についた私からすれば、これは（　Ⅲ　）な疑似科学です。

（中略）

まず、「水が言葉を理解する」という、常識を超えた仮説に基

づいていることに注意が必要です。突飛な仮説であればあるほど慎重な検証が必要ですが、この写真集では、仮説通りになった事例だけが紹介され、「どのように言葉を理解するのか」という、最も知りたいメカニズムについてまったく言及していないことに疑問を感じます。また、論文の形で実験手法が紹介されていないため、第三者が同じ実験をして再現することも不可能です。

「再現性」は、科学のプロセスではとても大切なことです。誰がやっても、どこでやっても、同じ方法なら同じ結果が出ることを意味します。

たとえば、「水が言葉を理解する」という仮説に興味を持った人物が、自分の実験室で実験を繰り返したとしましょう。「ありがとう」の文字を「見せた」水を一〇〇回凍らせて、きれいな（というのも判断が難しいですが）結晶になった回数が五〇回、そうではない回数が五〇回だった、という結果を得たとしても、実験手法が公開されていなければ、仮説の提唱者は「それは実験のやり方がまずいからだ。私は一〇〇回やって一〇〇回、きれいな結晶をつくれる」と言い逃れることができます。「誰がやっても、同じ条件ならば同じ結果がでる」という原則が守られていない以上、科学的な議論ができないのです。

この状態を、科学の世界では「反証可能性がない」と言います。これも、科学と疑似科学を見分ける大切なポイントです。「誰かが主張する仮説を反証できるとき、それは科学である」。言い換えると、「第三者が追試して反証できるだけの材料を提唱者が提示しないとき、その行為や成果は科学とは呼べない」ということです。

こうして、長い時間をかけて、本人以外の多くの人が検証し、「ウソではない」と合意された知識の集まりが科学です。「観察する→仮説を立てる→結果を予測し、実験をする→成功、失敗を含め結果を公表する→第三者によって追試され、議論される（検証）」という作業のくり返しによって、科学は精度を高めていきます。

（元村有希子「カガク力を強くする！」より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。）

注　ツイッター…現在は「X」と呼ばれるＳＮＳ。

問一　（　Ⅰ　）～（　Ⅲ　）に入ることばとして適当なものを、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。（同じものは二度選べません。）

ア　人為的　　**イ**　圧倒的（あっとうてき）　　**ウ**　神秘的

エ　結果的　　**オ**　典型的

問二　――線部①「『裏を取る』という作業」とありますが、その作業をイルカの漂着と地震の関係について実践（じっせん）するとすれば、どのようなことを調べればよいと考えられますか。本文中のことばを使って、三十五字以内で書きなさい。

問三　――線部②「Aが B の原因になった」とありますが、それを言い換えた次の文の【　　】に入ることばを、本文中から四字で書きぬきなさい。

AとBには【　　】がある。

問四　――線部③「四月一二日に巨大地震が起きる」とありますが、そのうわさが広まった原因として適当なものには○、適当でないものには×を、次の**ア**～**オ**につけなさい。

ア　よくあるできごとではあるが、四月一〇日に、一五〇頭以上のイルカが茨城県の海岸に打ち上げられた。

イ　東日本大震災が起きる前にも四月一〇日と同じようなできごとがあったため、そのできごとを「地震の前触れではないか」と考える人たちがいた。

ウ　阪神・淡路大震災を言い当てたアメリカの霊能者が、四月一二日に大きな地震が起きると予言していた。

エ　人間にとって恐（おそ）ろしい地震がいつ発生するかを予測する技術はまだ確立しておらず、不安になった結果、説得力のある説明に飛びつきたくなった。

オ　巨大地震が起きるたびにイルカが海岸に打ち上げられているといううわさを信じる人たちがたくさんいた。

問五　――線部④「そうした科学への信頼」とありますが、どのような信頼ですか。その説明として間違っているものを、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

ア　科学的なデータはどんな状況でも揺るがないという信頼。

イ　科学を志す人間は理屈っぽく物事を考えるものだという信頼。

ウ　科学的に考えられたものは、客観的で絶対に正しいという信頼。

エ　科学的に出した結論が、唯一の答えであるという信頼。

オ　科学において物事は論理的に考えられているという信頼。

問六　――線部⑤「『水からの伝言』」とありますが、それが「疑似科学」だといえるのはなぜですか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

ア　実験手法が公開されていないため、仮説に反証できるだけの実験が第三者にはできないから。

イ　第三者がやっても再現性が得られないが、仮説の提唱者が行う実験は一〇〇回中一〇〇回成功したから。

ウ　常識を超えた仮説に基づいているにもかかわらず、仮説通りになった事例が紹介されているから。

エ　氷の結晶にまつわる素人のあやしい仮説に科学者がお墨付きを与えて、それらしく見せているから。

オ　科学的な議論には客観性が必要であるにもかかわらず、哲学的な意味を持たせたいとあとがきに書いているから。

問七　――線部⑥「その主張や実証方法に私は当初から違和感を覚えた」とありますが、筆者が違和感を覚えた主張とはどのようなものですか。これについて説明した次の文の【　　】に入ることばを、【　ア　】は十六字、【　イ　】は二字で、本文中から書きぬきなさい。

【　ア　】はもちろん、【　イ　】までもが水には備わっているという主張。

問八　本文を読んだ後に、生徒たちが以下のように話し合っています。これを読んで、後の問いに答えなさい。

生徒Ａ　本文の最初の方に大切なのは「疑う」こと、と出てきたね。

生徒Ｂ　実際に筆者も書いているけど、「疑う」ってなんだか悪いことのような気がするよね。

生徒Ａ　そうだね。でも、筆者のいう「疑う」ことは、【　ア　】ことだから、決して悪いことではないんだよ。この「疑う」力が、筆者のいう【　イ　】なんだ。

生徒Ｂ　そうなんだね。じゃあ、【　イ　】をつけるためには、どうしたらいいんだろう？

生徒Ａ　先生から、次の《資料》を預かったから、これを読んでみよう。別の人が書いた本だけど、同じように「疑う力」について述べられているみたい。

《資料》

疑う力を養うことは、ウソを見抜く作業というより、「本当にそうなのか」と問いを立てるために必要です。

他人の話や情報を鵜呑みにしがちな人は、納得する前に立ち止まる習慣をつけましょう。

ＳＮＳが社会に浸透した結果、誰もが批判や分析をするようになりました。一億総評論家状態と言っていいかもしれません。

色々考えて自分の意見を持つことは素晴らしい。でも、意見を述べるには、その対象についてある程度しっかりした知見が必要です。

『広辞苑』によれば、知見とは、「見て知ること。また、その結果得られた知識」だそうです。仏教の世界では、

「智慧(ちえ)による洞察(どうさつ)」。

物事を判断したいのであれば、知見を大切にしなければならないのです。

（真山仁(まやまじん)「〝正しい〟を疑え！」より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。）

生徒B　なるほど、本文の筆者がいう「疑う」を実践するために大切なのは、「知見」だと《資料》には書かれているね。じゃあ、同じように《資料》に基づいて考えると、その知見を得るためにはどうしたらいいんだろう？

生徒A　たとえば、【　　ウ　　】といいんじゃないかな。

(1)　会話文中の【　ア　】・【　イ　】に入ることばを、【　ア　】は十二字、【　イ　】は四字で、本文中から書きぬきなさい。ただし、二つある【　イ　】には同じことばが入ります。

(2)　会話文中の【　ウ　】に入る具体的な意見を、《資料》の文章をもとに、あなたなりに考えて書きなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。）

「中学一年生の私（海月）は、幼馴染みの樹絵里に飛行クラブに誘われた。仕方なく見学に行ってみると、部長の斎藤神は変人で、顧問の立木先生もやる気はないらしいことが分かったが、結局、成り行きで入部することになってしまった。」

①問題は山積みだ。

まずは活動場所。今は仮に二年二組の教室となっている。けれどこれは放課後に斎藤先輩が一人勝手に残っていた状態の追認であって、あくまでも仮の状態で申請されている。そしてその申請は、まだ通っていない。何しろ部員数が規定の最低ラインに達していないのだから。だいたいが、活動目的さえ定かじゃないんだから、もうどうしようもない。

部員に関しては、一応私と樹絵里とで努力は続けている。けれど予想はしていたものの、難航中だ。

「非行クラブ？　何それ、煙草吸ったり、頭金髪に染めたりすんの？」

なんていう、いつか来た道な会話を幾度くりかえしたものやら。だいたい、私たちはまだ入学したばかりで、部活勧誘なんて親密な会話ができるのは同小出身の子たちばかりだ。それも女子に限定していたから、※パイはもともとそんなに大きくない。それに、私みたいに体育会系はイヤ、音楽も美術もイヤ、なんて、いかにも「何ひとつ取り柄がありません」てな発言をする子はむしろ少数派で、皆それぞれの興味に基づいて、落ち着き先をさっさと決めつつあった。

そんなこんなで勧誘活動は、あっという間に②暗礁に乗り上げてしまった。

「そりゃそうだよねー、当の私たちだって何するクラブなのかよくわかっていないんだもんねー」

嫌味にならないよう気をつけながら、樹絵里にぼやいてみる。樹絵里はそんな私の配慮には無頓着で、「そうだよねー」なんて（　A　）応じている。「やっちまったー」的な危機感やら焦燥感を抱いているのは、どうやら私一人であるらしい。

それは部の集まりにも如実に表れていて、ある日の放課後、二年二組の教室に足を運ぶと、そこには誰もいなかった。樹絵里はクラスの当番があり、中村先輩は野球部のミーティングだ。樹絵

里は中村先輩がいないのを知っているから、いたってのんびり仕事を片づけていた。まだゴミ捨てだの、日誌だのがあるから当分かかるだろう。

斎藤先輩までいないのは珍しいなと思いながら入っていくと、開いた窓の向こうに、当の部長がいた。ここは二階なので、当然そちらはベランダだ。あの独特のヘアスタイルは、後ろから見たってすぐにわかる。

うぇ、二人っきりかぁ……わかっていたことだけど、今さらながらに怯んでしまう。斎藤先輩、無愛想だし、変わっているし。これが、中村先輩と二人でも、やっぱり困ってしまうことには変わりないけど、でも……。

いっそ戻って樹絵里の仕事を手伝おうかとも思ったけれど、なんだかそれもめんどうだった。

一度、樹絵里から「くーちゃんって意外とものぐさだよね」と言われたことがある。そのときは大いに不本意だったけど、実はまるきり的外れというわけでもない。

私はやらなきゃならないことなら、それが宿題だろうとテスト勉強だろうと、自由研究という名の強制的な研究だろうと、早めにきっちり済ませるタチだ。けれど、別にみんながやらなくてもいいこと、誰がやってもいいようなこと、ましてやボランティアみたいなことだと、全体の空気を読みつつ、やらないで済ませられるならぜひとも逃げたいと思い、その方向に動く（まあそういう場合って、手を挙げないとか、率先してまで行動しないとかなので、「動かない」と表現した方がふさわしいのかもしれないけれど）。

部が発足してまだ日が浅いけれど、中村先輩は「率先して動く」タイプだってことはなんとなくわかる。樹絵里はそういう人に引きずられて、（　Ⅰ　）的に動くタイプ。

③斎藤先輩はどうなんだろうと、ふと思う。

もちろん、率先タイプじゃない。むしろ、テコでも動かないって感じ。でも、私の「動かない」は自分がラクしたいためだけど、斎藤先輩のは明らかに違う。だってどう考えてもラクなんかじゃないよ、誰も支持してくれないクラブ活動を、たった一人で一年間も続けるなんてこと（果たしてそれが、活動と呼べるものであったかどうかはこの際おいておくとして、だけど）。

私はちらりとその人の方を見やった。

ベランダの手すりに上半身を預けて、ただ、空を見上げている。太陽は斜めに傾き、薄雲が走る。明るい、きれいな空だ。そ

の前で、黒い染みのように先輩はたたずんでいる。その学生服の背中に向かって、思わず声をかけていた。

「斎藤先輩は、どうして空を飛びたいんですか？」

（　B　）したように黒い肩が揺れ、カミサマ部長はゆっくりと振り返った。

「だって、君だって飛びたいでしょ？」

何を当たり前のことをと言わんばかりに、先輩は言う。

「そんなこと、考えたこともないです」

そう返す私に、「本当に？　一度も？　小さい子どもの頃も？」と、畳みかけるように先輩は言う。「商店街でもらった風船につかまって、空高く飛んでいきたいって、考えたことはない？　ほうきにまたがって、飛べたらいいなって思ったことはない？　ドラえもんのタケコプターが欲しいって思ったことは？」

そう追及されて、私は④犯行を自供するみたいに答えた。

「それは、子どもの頃は、あるかもですが……」

「誰だって、あるんだよ」むやみと断定的に、部長は言った。

「空飛ぶ夢を一度も見たことのない人間なんて、一人だっているわけはないんだ」

「夢って、起きて見る方ですか、それとも寝て見る方？」

恐る恐る尋ねると、先輩は（　C　）言った。

「どっちにしたって、大して変わらないでしょ」

いやぁ、けっこう変わると……大いに変わると思うんだけど。

「君さ、⑤風船おじさんって、知ってる？」

いきなり思いがけないことを言われて、私は首を傾げた。

「……え？　あの、大道芸とかで、長い風船使ってウサギとかキリンとか作ったりする人のこと？」

「全然違う」

……なんだよ、人が一生懸命答えたのに。

「じゃー、なんですかー？」

もはや義務感からだけで、超おざなりに尋ねてやった。ああ、早く樹絵里が来ないかなあ。

「本当に知らないのか。すごく有名な人だぞ」

なんでかなあ、「無知に呆れ果てた」って言っているように聞こえるよ。

斎藤先輩は、仕方ない、教えてやろうと言わんばかりの様子で教室の中に戻ってきた。戻ってこなくても良かったのに。

「風船おじさんは、空が飛びたかったんだ。だから、体にヘリウム風船をたくさんつけて、多摩川の河川敷から大空に飛び立った」

「飛び立って、どうしたんですか？」
「大田区の民家の上に落ちて、屋根を壊した。幸い、おじさんは無事だったけど」
「ずいぶんはた迷惑な人ですね」
「冒険ってのはそもそも迷惑なものなんだよ」と先輩はなぜか偉そうに胸を張る。
「そして風船おじさんは同じ年の十一月に、巨大な風船をたくさんつけた、檜の風呂桶みたいなゴンドラに乗って、再び飛び立った」
「懲りないですね。で、今度はどこに落っこちたんですか？　空から檜風呂が落ちてきたりしたら、かなり危険ですよね」
「どこに落ちたか、それとも落ちていないかはわからない」
「え？」
「太平洋を横断すると言って飛び立って、二日後にＳＯＳ信号が発信されて、それきり行方不明になっている」
「……うわぁ」
　なんとコメントしてよいやらわからない。無事だったら、軽い怪我で済んでいれば、「なんてバカなんだろう」と言えるんだけど。いや、家族みたいな気安い間柄で、テレビのニュースでそれを見たのなら、「バカだなあ」って笑いあっている、きっと。
「みんなが、彼を嗤った」
　ふいに、怒ったような声で斎藤先輩は言った。心を読まれたような気がして、どきりとした。
「ほんとは嗤う資格なんてないんだ」強い口調で先輩は続ける。
「一生、地面に貼り付いたままの連中になんて。地球の重力から自由になりたいと思わない連中になんて」
　怒ったような、じゃない。確かに、斎藤先輩は怒っていた。
　いつも、一貫して偉そうで、ほとんど表情の動かない先輩が。他人のために、たぶん、会ったこともない人のために、猛烈に怒っている。
　ふーん、と思った。
「……斎藤先輩は、本当に空を飛びたいんですね」
　我ながら、妙にしみじみとした言い方だった。斎藤部長は（Ｄ）力の抜けたような顔をし、それから窓の外を眺め、おそらくはそこから見える空の切れ端を眺め……そして言った。
「うん、そうなんだ」
　その気持ちに、ウソはないんだろう。それはよくわかった。もとよりその点を疑っていたわけでもない。だけど……。

「なら、いつまで地面に貼り付いているつもりですか？」

⑥強い口調で言ってやった。先輩はびっくりしたようにこちらを見やる。

「ぼんやり空を見上げたり、本を読んだりしてるだけじゃ、いつまで経っても空なんて飛べませんよ。今すぐに動きださなきゃ。飛行機だって、離陸のためには勢いつけて走り出すでしょう？」

言ってみればそれは、唐突に燃え上がった炎だった。

自分でも不思議だ。中学生が空を飛ぶ。そんなの、無謀で荒唐無稽で誰が聞いても嗤うようなことだ。

なのに、本当に自分でも信じがたいことに、斎藤先輩の「空を飛びたい」という願いに、私は強く共感してしまったのだ。

斎藤先輩は飛びたがっている凧なんだと、ふと思った。誰かが糸を引いて走り出してやらなきゃ、きっと一生、空なんて飛べやしないのだ。

これは、誰がやってもいいようなことじゃない。だって誰もやらないよ、こんな馬鹿でなんの得にもならないようなこと。

（加納朋子「少年少女飛行倶楽部」より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。）

注　パイ…ある物事の総体。ここでは、「私が飛行クラブに勧誘できる人材の総数」のこと。

問一　（　A　）～（　D　）に入ることばとして適当なものを、次のア～カから選び、記号で答えなさい。（同じものは二度選べません。）

ア　ふっと　　イ　びくりと　　ウ　かすかに

エ　ぞっと　　オ　のんきに　　カ　あっさりと

問二　――線部①「問題は山積みだ」とありますが、飛行クラブの問題とはどのようなことですか。三つ、本文中のことばを使って、それぞれ十五字以内で書きなさい。

問三　――線部②「暗礁に乗り上げてしまった」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　勧誘活動の方法を考え直しているということ。

イ　勧誘活動が行き詰まってしまったということ。

ウ　勧誘活動に対する努力が足りなかったということ。

エ　勧誘活動にやる気がなくなってしまったということ。

オ　勧誘活動には非常に時間がかかりそうだということ。

問四　（　Ⅰ　）には、「一定の主義・主張なく、他の説に賛同すること」という意味の四字熟語が入ります。この四字熟語を、「同」という漢字を用いて書きなさい。

問五　――線部③「斎藤先輩はどうなんだろう」とありますが、斎藤先輩のことを「私」はどのように分析していますか。本文全体をふまえて説明した次の文の【　　】に入ることばを、【　ア　】は四字、【　イ　】は八字、【　エ　】は九字で本文中から書きぬきなさい。また、【　ウ　】は十五字以内、【　オ　】は十字以内で、ともに本文中の比喩（ひゆ）表現を参考に、自分のことばを使って書きなさい。ただし、二つある【　ア　】には同じことばが入ります。

私と同じ【　ア　】タイプではあるが、私と違って【　イ　】ために「【　ア　】」のではなく、むしろ【　ウ　】タイプであり、実は【　エ　】のように、動き出すためには【　オ　】が必要なタイプである。

問六　――線部④「犯行を自供するみたいに」とありますが、「私」はなぜこのようになってしまったのですか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

ア　「そんなこと、考えたこともないです」という私の答えに対し、言葉を変えて繰り返し確認されたため、斎藤先輩の質問を肯定（こうてい）するしかなくなってしまったから。

イ　一度は「そんなこと、考えたこともないです」と答えたものの、実際に幼少期を振り返ってみると、間違いなく空を飛びたいと思ったことがあることに思い至ったから。

ウ　「君だって飛びたいでしょ？」という質問を否定したにもかかわらず、斎藤先輩は重ねて私を問い詰めてきたため、もうやめてほしいという気持ちが強くなったから。

エ　一度は「君だって飛びたいでしょ？」という斎藤先輩の質問を否定したものの、重ねて問い詰められると、確かに飛びたいと思ったことがないとはいえないと感じたから。

オ　斎藤先輩と同じような考えをもったことがあると思われるのがいやで、「そんなこと、考えたこともないです」とごまかしたが、しつこく追及されて観念したから。

問七　――線部⑤「風船おじさん」とありますが、斎藤先輩にとってどのような人物だと考えられますか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

ア　自由自在に空を飛ぶという夢を叶えたヒーロー。

イ　夢を叶えるために無謀な手段をとった愚かな人物。

ウ　他人への迷惑も顧みずに空を飛ぼうとした変人。

エ　何度も空を飛ぼうとしたがその度に失敗した凡人。

オ　空が飛びたいという夢を実際に行動にうつした英雄。

問八　――線部⑥「強い口調で言ってやった」とありますが、このときの私の気持ちの説明として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

ア　斎藤先輩が本当に空を飛びたいんだということは分かったが、自分では動く気のない先輩のために自ら率先して動くのは嫌なため、どうにかして先輩に発破をかけたいと思っている。

イ　自分でも信じがたいことに斎藤先輩の「空を飛びたい」という願いに強く共感してしまったため、自分では動こうとしていない斎藤先輩にもどかしさを覚え、なんとか先輩を動かしたいと思っている。

ウ　誰が聞いても嗤うような斎藤先輩の「空を飛びたい」という願いが本当だとわかったが、先輩に行動する気がないようなので、自分が飛行クラブで代わりにその夢を実現してやろうと意欲に満ちている。

エ　斎藤先輩の無謀で荒唐無稽な「空を飛びたい」という願いをかなえるには強い気持ちが必要なのに、先輩はぼんやり空を見上げているだけで、思いの強さを感じられないことに怒りを覚えている。

オ　斎藤先輩が本当に空を飛びたがっているにもかかわらず、いつまでも地面に貼り付いていることにおどろき、今すぐに動き出せば中学生でも飛ぶことが可能であると教えたいと思っている。

三　次の漢字を用いる例として最も適当なものを、後のア～ウから選び、記号で答えなさい。

(1)　量る

ア　重さをハカる　　イ　道の幅をハカる

ウ　便宜をハカる

(2)　絶つ

ア　面目がタつ　　イ　悪縁をタつ

ウ　生地をタつ

(3)　執る

ア　出欠をトる　　イ　筆をトる

ウ　決をトる

(4)　納める

ア　国をオサめる　　イ　成功をオサめる

ウ　税金をオサめる

(5)　差す

ア　傘をサす　　イ　釘をサす

ウ　北の方角をサす

四　次の熟語について、(1)・(2)は類義語、(3)～(5)は対義語を漢字二字で答えなさい。ただし、答えの熟語は、（　）内の共通する部首をもつものとします。

例　衛生（にんべん）→保健　※類義語

(1)　役者（にんべん）

(2)　機構（いとへん）

(3)　遠洋（さんずい）

(4)　片道（ぎょうにんべん）

(5)　伐採（きへん）

五　次の――線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

(1) 制服を貸与する。
(2) 食べ物の屋台が多く出ている。
(3) そんなのは机上の空論だ。
(4) 列車が警笛を鳴らす。
(5) 党首として責任がある。
(6) 幅広いソウから支持される。
(7) アサバンの運動を欠かさない。
(8) 学校からまっすぐキタクする。
(9) 店のソンエキを確認（かくにん）する。
(10) 荷物をトドける。